

---

# 彼女に贈る言葉

緯切

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女に贈る言葉

### 【Zコード】

Z3752J

### 【作者名】

緯切

### 【あらすじ】

崩壊が進む世界で、彼は『彼女』を思つ。  
不老不死の彼と不老不死だつた彼女の物語。  
君は、幸せだつただろうか？

(前書き)

この小説は『彼女が微笑う理由』の続編です。読まなくても話が分かるようにはしてあります、もしよければ、読んで頂けると嬉しいです。

「やあ

「久しぶりだね」

「君は還れたかな

人間として、死ねたのかな。

殺した僕が言うことじゃないけどね。

地上から遙か上に浮遊する、無数の巨大な岩盤。それらの表面には銀色に煌めく草原が広がり、微かな光も反射して、それはそれは幻想的だ。・・・・・この植物が生気の感じられない、虚無の空間にしか生えないということを除けば、人食い草とかじゃないだけ、マシか。

僕が一番低い岩盤　　といつても、首が痛くなるほど見上げないといけない高さなのだが、それに向かって言葉を呴けば、ゆっくりと岩盤が降りてきた。何を呴いたかは、まあ内緒ということで。声に出たか出ないか微妙なくらい小さな呴きなのに、あんな高さの岩盤には届いている、その事実は今も不気味で慣れない。たぶん、僕の顔は少し引き攣っていることだろう。傍から見れば、無表情にしか見えないだろうけど。

降りてきた岩盤に手を掛ける。見上げるほどの高さにあった岩盤は、今では僕の腰ほどの高さしかない。僕は置いた手を支えにして、何とか岩盤に乗る。この行為をあと十回以上は繰り返さなければならぬことを思うと、溜め息が尽きない。僕は決して運動神経は良くない。むしろ、平均を少し下回る。その平均も、今から一百年くらい前のものだから、今は平均がもつと高いだろう。

さて、それから三十分後。

やっと目的地に着いた。

一際大きい岩盤。これこそが僕の故郷、『儚き空の国』  
ラルキルツ。かつては世界で最も栄え、進んでいた国。今となつて  
はただの廃墟だ。

一 僕い  
ね

実に皮肉だと思う。今となつては、だけど。空の国は地上に降りたことで終焉を迎えた。大体の国人間は、地上の人間によつて科学的実験台にされたか、それに怒つて戦になつた時、無残に散つていつたか、どちらかだ。

「そりゃ、僕ってどちらでもないんだよね」

免れたんだつけ。

不老不死。それは化学・魔術共に永遠の命題であり、課題である。どこから発生したかは僕もよく知らないけど、呪い返しによつて継がれるとされている。

とほいえ、それを知つてゐる奴らは大体死んじやつたしね、もう僕以外は知らないんじやないかな？

せいぜい、足掻くがにいた。アーヴィングの世界は近づいて崩壊す

「うるさいだが、うるさいの國のようだ。」

他人なんてどうでもいいのね。

建物が無残に崩れて廃墟となり、銀色の草原の中で異様に目立つそれは、神殿だったものだ。神殿といいつつ、神なんて誰一人として信じちゃいなかつたけど。とりあえず祀つてましたみたいな。柱には国民全ての名が刻まれていて、結局、この国は民が全てだつた。

ふと、見覚えのある綴りを見つけた。

ロフィーシリス・ジスケルディア・アルフ  
性なし

長すぎるから、皆、ロフイスと呼んだ。

「どうか、僕がそう呼べって言つたんだっけ

だつて僕の名前だし。

名が長いのは国民性。皆、必要ないんじやないかつてくらい、長かつた。ジスケルティアは確か、親の名前だつて。特に思い出らしいものも無いし、重要性も無い。まあいいや。アルフエントは国民全員が名乗る。由来？さあね。あまりにも昔のことだから、忘れたよ。

「感傷に浸り過ぎたかな」

昔を懐かしむために此処に帰つて来たんじやないんだ。そんな理由で、面倒嫌いの僕が動く筈が無い。

廃墟から丁度良さそうな石を探す。

「墓石つて、どんなかんじだっけ・・・・・・？」

そう、僕は彼女の墓を作りに来たのだ。

「こんなものかな」

更に一時間。到着してから一時間は経つてしまつたが、目的は果たした。

「君が死んでから五十年か」

不老不死になると、時間の経過が分からなくなつていけない。

墓石の下には何も無い。ただ、石が置いてあるだけだ。不老不死は死んだら消滅するから、本来埋めるはずのものも無い。だからこうやつて語りかけても、そこには誰もいない。

でも、彼女がいたという証が欲しいと思った。僕以外に此処に来る者はいないから、証があつたつて、誰も知らない。だから、証があろうが無かるうが、彼女の存在を知らしめるには至らない。たとえ、それが自己満足だと言われても。

声を立てて軽く笑う。

「僕と君は対のようだ」

こんな感情、思いは、不老不死になつてからだつた。  
全てを失つた君とは大違ひだね。

墓石をそつと撫でる。墓石はひんやりとしていた。

僕は手で握れるくらいの小さく尖った石を取り出す。さつきの廃墟で拾つたものだ。人を殺せそつなほどに鋭い。この格好で人前に出たら、僕は殺人鬼扱いされそつだなあと、馬鹿なことを思つた。石を握りなおし、墓石を支える。

「墓石だから、彼女の名ぐらい刻まないと」

僕以外に覚えていない、否、僕以外は死んでしまつたから誰も知らない、彼女の名前。

「ねえ、リジエ」

ヴィルリジエンヌ・ラスカルディア・アルフェント。

普通は魔術とか機械で刻むのだろうが、生憎、僕は魔術は一つしか使えないし機械音痴だ。それに、僕がそんな用意周到なわけがない。彼女には悪いが、かなり下手糞な字になつてしまつた。

「いや、君はそんなことを気にする奴じやなかつたな  
むしろ、僕より字が汚かつたような」

そこで僕は気づく。国のことに関しては大した記憶も無いのに、彼女のことのはつきりと、明確に覚えている。僕は柄にも無く大笑いした。ああどうして。こんなに大切だつたのに。

「ほんと、僕は馬鹿だなあ・・・・・・・・・・・・・・  
守れなくて、ごめん。

ひとしきり笑つた僕は、餞別にと魔術を使つた。

「凍つ<sup>やば</sup>く刃<sup>やば</sup>ここに顯現」

言葉通り、氷の剣が発生した。

これは、彼女にとどめを刺した剣。

普通はこんなもの、餞別にしないんだけどね。と呴きつつ、剣を墓石の前に突き刺す。他に何も無いから。

そういえば、無機物を不老不死にしたらどうなるのだろうか。最初から生きてないしな。少なくとも、朽ちることは無くなるかな。

「意外と使える、かな」

彼女の墓を中心に、魔方陣らしきものを描いていく。魔術をまともに学んだ覚えは無いから、正しいとはいえないが、何も描かないよりもマシだと思う。相手が無機物というだけあって、彼女にやらせたときよりずっとといいかげんにやっている。

ま、失敗しても問題無いしね。駄目もとでやるわけだから、落胆も無い。何で描いたか？此処にはインクも無いしね、魔術といえば決まっているだろう？自分の血だよ。さつきの尖った意志でぶしりと刺して、あー血がまだ止まらない。痛みなんて百年前に感じなくなつたから、どうでもいいけど、気分的に、あまり見たたくない色だよね、血の赤つて。

さて。

呪い返しを始めよ。

その身に絡まる鎖 今一度その縛りを緩めて  
魂を天空へ 遥か彼方の虚空へと  
呪われし輪廻  
忌まわしき呪いは終わらない  
永遠を求める愚者よ  
その魂に消えることなき傷跡を

僕の声に彼女の声が重なる。聞こえるはずの無い声。

彼女は死んだ。僕が殺した。

彼女は世界で唯一、科学的に成功した不老不死だった。けれど、不老不死の代償はあまりにも大きかった。

彼女は始終、にこにこと笑顔だった。言葉を発することは出来なくなつた。実は、言葉に関しては彼女の演技だったわけだが。

彼女は化け物と呼ばれた。その所以は、人間を食べることから来ている。

共食い。自然界ではよくあることだが、人間としては異常。それ故、彼女は人間であることを否定された。僕としては、彼女は人間だと思う。僕は残念ながら、同じモノではなくなっていたけれど。科学者達は気づかなかつた。実験が成功して初めて気づいたのだ。不老不死は、老いないために、死なないために、膨大な生命力を必要とする。それは、普通、人間が摂取する食物だけでは補いきれない。結果、死んで間もない人間を食べることで、何とか補つていた。

補いきれなくなるとどうなるのか。それも実験された。結果、彼女の周囲の人間・動物・植物が突然死んだ。不可視のちからによつて、あらゆるものから生命力を摂取しようとすると不老不死。その存在は各国から重宝されたが、同時に危険視もされた。

彼女が不老不死の実験台にされる時、僕は既に不老不死だつた。

そんな僕に、彼女は言つた。

「じゃあ、私のことも殺してね」

僕は頷くしかなかつた。

親友たつての頼みだから、最初から断る気なんて微塵も無かつたけど。

その身に絡まる鎖 今一度その縛りを緩めて  
魂を光のもとへ 遥か彼方の輪廻の向こうへと

呪われし魂

忌まわしき呪いは紡がれ続ける

永遠を求める愚者よ

その輪廻に訪れることなき終焉を

証を残すことが彼女にとつて幸せかどうかは分からぬけれど、この呪いが証を永久のものにしてくれるなら、それでいいと思う。

「リジエ、僕の親友」  
さよなら。

生まれ変わったとしても、もう、逢うことはないだらうね。

僕は今、灰色の荒野を歩いている。因みに、歩き始めてから五日は経つた。いい加減、この景色にも飽きてきた頃だ。

あの後、僕はまた三十分ほどかけて、地上に降りた。

地上にも、あの銀色は広がっていた。今はこの辺りにしか生えていないけど、いずれは世界各国で見られるようになるだろう。世界に“彼女”という不老不死はいなくなつたけれど、不老不死が一人もいないわけじゃない。現に、僕も不老不死だ。さつき呪い返しで不老不死を墓石にかけたけど、僕は呪い返しを過去に一回被つたから、まだ不老不死だ。面倒なことに。

「僕だつて、望んで不老不死になつたんぢやないんだけどな」

死ねるつて、幸せだよ。いつか必ず終われるというのは。終わりがあるから、頑張れるんだろうな。・・・・・今の僕は終わりが無いから、空虚に生きてる。昔も大して変わらなかつたけどね。

「リジー、君は幸せだつたのだろうか」

不老不死になつて、人間を食べて、化け物呼ばわりされて。

「でも、僕としては、君がいて幸せだつたよ」

そう、僕は幸せ“だつた”。

では何故、幸せでもないこの世界を生きるのか。

「たぶん義務、なんだろうな」

不老不死は膨大な生命力を消費する。不老不死なんて、そんな生き物は存在しない。あるのは、不老不死という呪いに生かされ続ける愚者だけ。呪いの持続に他の生命力を消費し続けるというのは、何て滑稽なのだろう。

今、世界は崩壊へと向かつている。

人間達が求めてやまない、不老不死の存在によつて。

「僕が生きる限り、世界の生命力は奪われ続け、枯渇する。僕が死んでも、他の何かが不老不死に成り代わるのだから、どちらにしろ、世界の崩壊は避けられない」

不老不死がいつ、どのようにして発生したのかは分からない。どういうな思惑で発生したにしろ、もう止まらないのだから。

「それなら、僕は敢えて、不老不死として生きよう」

世界の崩壊を見届けよ。』

彼女の愛した世界を。

彼女の愛した生き物を。

彼女が羨んだ地上を。

彼女が口に出したわけじゃないけれど、僕は彼女の親友だから。彼女の願いぐらい、見届けたっていいだろ？ どうせ、世界の崩壊は止まらないし、僕の存在を覚えてる奴もいない。

「ねえ」

愚かな地上の民。

「これが、君たちの望んだことだよ」

ぶつちやけ、僕はどうぞちりだよね。

かれこれ二十年が過ぎた。早いものだ。

世界は銀色に煌めく草原に覆われている。

最近気づいたんだけど、この草って、生きてないんだよね。生きてたら、僕の傍で風にそよいでるわけがないんだ。何でも、不老不死の研究途中に出来たもので、絶望を食つて育つ、魔術による物体らしい。育つが、生きてはいない。なんとも不思議だ。ちょっとした負のエネルギーでも育つから、こんなものをこれ以上生み出してはかなわない。魔術的な研究は禁止したらしい。旅途中、どつかの研究所跡地で見つけた資料にそう書いてあった。

ここまでで分かるかもしぬないけど、世界は崩壊直前だ。生き物

も、まあ大体、僕以外は死んだんじゃないかな。空は翳り、陽も差さず、川や海は渴き、大地は生き物が決して住めはしないだろう状態だ。実に悲惨というか哀れというか。

「同情はしないよ」

「うん。何か、神か何かにでもなつた気分。

神は、いたとしたら、こんな気分で世界を見下ろしているのだろうか。

「…………なんて、僕らしくもない」

ああそうだ。彼女にこの様子を伝えないと。見届けると、そして近況も報告するからと、彼女の墓石で約束したのに。何か、そろそろ世界も崩れそうだし。もしかして、もう時間が無かつたりするのかな？

「せめて、墓に戻るくらいの時間は欲しかつたな」

呟くと同時に、空が剥がれ落ちた。

啞然。驚愕。言葉が出なかつた。

ガラスか何かが割れるような、高く澄んだ音を立てて、世界は崩壊を始めた。

それは、世界があるべき姿へ向かうように見えた。少なくとも、僕にはそう見えた。

無意識に震えていた身体を叱咤し、喉から何とか声を絞り出す。

「…………拝啓、僕の、親友」

言葉を必死に選んで、もはや空ではない空へ紡ぐ。

「やつと、世界の終わりが来たよ」

「君が死んでから百年近くかかったけど、これで、もう、終わるね」

「君はいつも、世界は美しいと、生きることは素晴らしいと、言っていたね」

「僕はいつも、それをくだらない、愚かだと、切り捨てたけど、今なら、君の言い分が分からなくもないよ」

「今となつては、僕以外、何も生きていなければ、世界が崩壊す

るさまは比べようが無い珍ビト、美しく、優しく、素晴らしいよ。

「君にも見て欲しかった」

「それとも、どこかで、見ていいのだろうか」

「世界が崩壊したら、僕はどうなるのだろう」

「君のように死ねるのか、それとも、奈落へ」

「いや、考えるのはよそ」

「でも、出来ることなら、君と同じ処へ」

「……違うな」

「君の隣にいたかったよ」

「僕の望みは、願いは、それだけだった」

「それじゃあ、僕の親友」

「もう逢つことは無いけれど」

「リジ」

さよなら。

それは言葉にする前に崩壊に呑まれてしまつたけれど。  
バイバイ、と、彼女の声が聞こえた気がした。

ロフイス、幸せってなあに？

そんなの、人それぞれさ。

ねえロフイス、私たちずっと一緒によね！

当たり前だよ。僕ら、親友だからね。

それでも僕は願い続ける。彼女に逢えますよ！、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3752j/>

---

彼女に贈る言葉

2011年2月3日15時00分発行